＜紹介＞ Abeillé, A. & Godard, D. (dir.) (2021) *La Grande Grammaire du français*, Actes Sud

國末 薫

1980 年代以降、イタリア語の *Grande grammatica italiana di consultazione*、スペイン語の *Gramática descriptiva de la lengua española*、英語の *The Cambridge Grammar of the English Language* などヨーロッパの諸言語では、記述的なアプローチを取る文法書が作成されてきた。本書は、このようなフランス語学を取り巻く状況を背景に、2002 年に企画され、19 年の歳月をかけて編纂された文法書である。フランス、ベルギー、カナダなどのフランス語圏をはじめとして、スウェーデン、オランダ、イギリスなど 10 ヵ国の大学や研究所から計 50 名以上の研究者が参加した国際的な協同プロジェクトにより作成された。

本書の特徴として以下の 2 点があげられる。

まず、編纂代表である Abeillé, Delaveau & Godard (2007 : 421) が « Il s'agit d'une grammaire qui se concentre essentiellement sur la syntaxe » と企画段階から述べているように、本書では統語論に重きを置いており、語彙、音韻、意味、談話などの言語の様々な側面が、統語との関係から記述されている。このことは、本書の構成からも窺える。既存のフランス語の文法書 *Le Bon Usage* や *Grammaire méthodique du français* においては、音声、書記体系、語の成り立ちといった言語の形式的側面が第一部で紹介されているが、本書では、「文」をまず規定し、「文」の重要な構成要素である「動詞」、次いで「動詞」に結合する主要な要素である「名詞句」、そして「限定と限量」の順で扱い、統語的な結びつきを想起させる構成となっている。音声形式より文を構成する要素が大きな位置を占めており、先述した英語の *The Cambridge Grammar of the English Language* と共通するアプローチを取っている。

次いで、本書が重視するのがフランス語のヴァリエーションの記述である。これまで文法書で網羅的に扱われることが少なかった話し言葉やフランス語の方言及び地域差に着目し、フランス語が実際にどのように書かれ、話されているのかを詳細に記述することに比重を置いている。そのため、本書は、従来の文法書のような作例に加えて、1950 年以降の書き言葉と話し言葉のコーパスデータ 30000 例に基づいて作成された。コーパスデータの収集にあたっては、テキストや談話のジャンルの多様性が考慮されている。書き言葉のコーパスデータには、文学や人文科学の書籍、新聞など、これまで多くの文法書で取り上げられたテキストジャンルだけでなく、バンド・デシネ、インターネットサイト、SMS、ブログや掲示板が含められている。話し言葉コーパスデータには、ラジオやテレビ番組、映画、歌、寸劇に加え、*ESLO* や *Corpaix* など 10 以上のインタビュー・会話コーパスも含まれる。また、カナダ (*CFPQ*) やスイス (*OFROM*) の話し言葉も収録しており、フランス以外の地域におけるフランス語の特徴を社会言語学的な観点から記述している。

本書は、全体で 2628 頁、2 巻で構成されている。第 1 巻では、文を構成する主要な要素と文の

意味的側面が取り上げられている。第 2 巻では、文と文の繋がりや文を越えた単位が中心的な内容である。

第一巻

Chapitre I	La phrase	文
Chapitre II	Le verbe	動詞
Chapitre III	Les constructions verbales fusionnées	融合した動詞構文
Chapitre IV	Le nom et le syntagme nominal	名詞と名詞句
Chapitre V	La détermination et la quantification	限定と限量
Chapitre VI	L'adjectif et le syntagme adjectival	形容詞と形容詞句
Chapitre VII	La préposition et le syntagme prépositionnel	前置詞と前置詞句
Chapitre VIII	Les adverbes	副詞
Chapitre IX	Les proformes	代用形
Chapitre X	La négation	否定
Chapitre XI	Le temps, l'aspect et le mode	時制、アスペクト、モード

第二巻

Chapitre XII	Les types de phrases	文の種類
Chapitre XIII	Les subordonnées relatives	関係節
Chapitre XIV	Les subordonnées circonstancielles	状況補語
Chapitre XV	Les comparatives et les consécutives	比較級と結果節
Chapitre XVI	La coordination et la juxtaposition	等位と並置
Chapitre XVII	L'ordre des mots	語順
Chapitre XVIII	La syntaxe, l'énoncé et le discours	統語、発話と談話
Chapitre XIX	La forme sonore des énoncés	発話の音声形式
Chapitre XX	La ponctuation et les codes de l'écrit	句読法と書き言葉のコード

本書を特徴づける項目の一つとして、「句読法と書き言葉のコード」の章があげられる。句読法やコードに関して、本書では従来の文法書に記述されてきた特徴に加え、 SMS の文字コード、エモティコン、絵文字など、近年広がった SNS による言語使用が紹介されている。« la syntaxe des signes iconiques » の項目では、絵文字の使用に見られる法則性について触れている。以上の点から、フランス語が使用される全ての場面を対象とし、統語的な観点から記述する本書の立場が見て取れる。

章末には、各節で扱ったトピックに応じて、参照すべき文献が記載されている。既存の文法書においても、章や文献の最後に参考文献が記されているが、多くは各章で引用した文献の出典を網羅的に記載するにとどまる。本書ではトピック毎に参考文献が記載されているため、興味のある分野における主要文献を容易に見出すことができる。文法知識を深めたい学習者や研究を始め

る学生が関心分野について調べる際に最初に確認しておきたい一冊である。

一方で、本書の最大の目的である、フランス語のヴァリエーションを記述することに関しては、課題も残されている。話し言葉や方言を収録したコーパスに基づいて作成されているものの、必ずしも文中でコーパスデータについて十分な言及がなされているとは言えず、コラムで例文と簡単な説明を掲載する傾向にある。豊富なジャンルを記述対象としているにもかかわらず、テキストジャンルや地域による差異が計量的に示されることが少なかった点も今後の課題であろう。この点について、Coltier & Masseron (2022 : 204) は、「現代フランス語に関する言語学的知識の最新かつ網羅的で均質な総体という目標を達成するものではない」と本書を批判的に評価している。また、 Deulofeu & Debaisieux (2012) が指摘するように、コーパス駆動型の文法書がフランス語において欠如している現状には未だ改善の余地がある。

以上のような問題を抱えつつも、話し言葉、方言などのヴァリエーションを扱うことを重視した文法書が編纂されたことは、フランス国内のみならず、国外のフランス語学の研究者及びフランス語教育者の一助となるだろう。ヴァリエーションに重きを置く本書の作成により、学習者に対し、発話状況や地域に応じてフランス語には様々な形があることを、実例を用いて説明することが可能になり、教育的価値も大きい。今後、フランス語のヴァリエーションに関する研究活動、教育活動が進められる際に、大いに参照されることが期待される。

最後に、本書の内容を踏まえ、日本国内に目を向けてみると、現状では、日本語で出版されているフランス語の文法書において、本書のようにフランス語のヴァリエーションや言語使用を重要視したものは少ない。英語をはじめとして、用法基盤型の言語習得観に基づく外国語教育が進められているなかで、社会言語学的要因、発話状況、テキストのジャンル、話者の特性といった観点から、フランス語の多様性を文法書で示していくことが必要であることを認識させてくれた一冊であった。

参考文献

Abeillé, A., Delaveau, A., & Godard, D. (2007) : « La Grande Grammaire du français : principes de construction », *Revue roumaine de linguistique*, LII, pp.403-419.

Bosque, I. & Demonte, V. (eds), (1999) : *Gramática descriptiva de la lengua española*, 3 vols, Madrid, Real Academia Española.

Coltier, D., & Masseron, C. (2022) : « Anne ABEILLÉ, Danièle GODARD (dir.), Grande Grammaire du Français », *Scolia* [En ligne], 36 | 2022, mis en ligne le 08 juillet 2022, consulté le 20 juillet 2022. URL : http://journals.openedition. org/scolia/1979 ; DOI : https://doi.org/10.4000/scolia.1979

Deulofeu, H.-J. & Debaisieux, J.-M. (2012) : « Une tâche à accomplir pour la linguistique française du XXIe siècle : élaborer une grammaire des usages du français », *Langue française* 176, pp.27-46.

Grevisse, M. & Goose, A. (eds) (2016) : *Le Bon Usage : grammaire française : Grevisse langue française*, 16e éd. Louvain-la-Neuve, De Boeck Supérieur

Huddleston, R. D. & Pullum, G. K. (eds) (2002) : *The Cambridge Grammar of the English Language*, 1 vol., Cambridge,

Cambridge University Press.

Renzi, L., Salvi, G., & Cardinaletti, A. (eds), (1989–1991) : *Grande grammatica italiana di consultazione*, 3 vols., Bologne, il Mulino.

Riegel, M., Pellat, J -C., & Rioul, R. (1994) : *Grammaire méthodique du français*, Paris, PUF.

（くにすえ　かおる / 東京外国大学大学院）